

Painful Relation

(車に乗っているユウヤ、アイ。降りて山道を歩く二人)

ユウヤ (声) 「いつもの三人でここに来た夏から、一年。あいつがいなくなってから、一年経った。あいつはここで消えた。俺と、強がりの恋人を残して」

----回想：一年前の夏、車を降りて待つユウヤ、アイ

ユウヤ「カズキ、もうちょっとで着くってさ」

アイ 「もう…絶対遅れないでって言ったのあの人のでしょ」

カズキ「ごめん！待たせちゃって」

ユウヤ「ずいぶんゆっくりだったな」

アイ 「言い出した人が寝坊で遅刻とかありえないんですけど」

カズキ「だからごめんって！…はい、これあげるからさ」

(カズキ、アイに飴を渡す)

ユウヤ「お前なあ、もっといいモンだせよ」

アイ「のど飴ってどうなの…」

カズキ「いいじゃん、機嫌直してよ、ねっ？」

アイ 「私が風邪でも引いていたなら、グッとくるんだけどねえ…」

----回想終わり

(最初のシーンに戻る)

ユウヤ (声) 「こいつらが付き合い始めても、三人の仲は変わらなかった。だからあの日もここに来たんだ。夏の思い出なんかいらんっていうアイを、なんとかカズキが連れ出して」

----回想：室内、静かに話し始めるアイ

アイ 「思い出なんて、増えるだけ厄介だよ。悲しい思い出は、思い出すたび辛くなるでしょ。いい思い出は…手放せなくて、辛くなるんだよ、そのうち。いい思い出が負担になるなんて、切ないよね…でもそうなの、思い出に縛られたくないから私はどこにも行かないの。特別なことも、しない」

----回想終わり

(湖畔を歩くカズキ、アイ)

ユウヤ (声) 「あんなこと言っていたアイが来るなんて、珍しいだろ？それなのに、あいつは消えた…あの夜、外に出たつきり戻らなかった。足を滑らせて崖から…なんて、ほんと馬鹿だよ、カズキ」

(崖に来るカズキ、アイ)

ユウヤ (声) 「恋人が突然いなくなって、アイも最初は動揺していたけれど…でもどこまでもアイらしかった、無理やり自分を納得させて必死に生きているみたいだった。そんなアイに俺は何もできなかったけれど…一年経って今日、思い出に触れたがらないアイがここに来る気になったのは、少し安心している」

ユウヤ 「…まだ、持ってる？」

アイ 「…うん」

(カズキからもらった飴玉を出す)

アイ 「やだなあ…こんなの持っていたって、仕方ないのに。持っていればいるほど手放せなくなるだけだって、わかっているんだけどね…」

ユウヤ (声) 「あいつが俺たちに残したのは、アイへの飴玉と、それから…」

ユウヤ 「アイ…ちょっといいか」

アイ 「…どうしたの」

ユウヤ 「あのさ、実はカズキのことでまだ伝えていなかったことがあって」

アイ 「なあに？今更何があるの？」

ユウヤ 「…これ」

(ユウヤ、封筒を差し出す)

(アイ、封筒を受け取る)

アイ 「何？これ…」

(アイ、封筒を開ける。鍵が出てくる)

カズキ 「あの日、あいつは寝過ごしたから遅れてきたんじゃない。お前に渡すこれを作っていたんだ、だから」

アイ 「待って、これはなんなの？」

ユウヤ 「合鍵だろ、あいつの部屋の」

アイ 「なんで…」

ユウヤ 「アイ、ずっと言ってたよな、『思い出は増えるほど厄介だ』って。あいつ笑ってたけど、ほんとは色々考えていたんだ。ずっと一緒にいることを、お前はまた『思い出が増えるだけだから』って嫌がるかもしれない。でも…それでもカズキは一緒にいることをお前に選んでほしかったんだよ。二人の時間が増えても悲しい思い出になんかならないって教えたい、自分がそうさせないってあいつは言った」

アイ 「…」

カズキ 「アイと一緒に旅行してくれるって決まって、カズキ、ほっとした。思い出も悪くないって思ってもらえたのかもしれないなってさ。そんな旅先でなら、アイもこれを受け取

ってくれるんじゃないかって…だからあいつはあの日に持ってきたんだ」

アイ 「だからってここまでしておいて…なんでいなくなっちゃったの…」

カズキ「仕方ないだろ…」

アイ 「最期の思い出が寝坊してきたカズキとか、かっこ悪いなあって…飴玉一つ残して
なくなっちゃって、馬鹿だなあって思ってたのに…。今更…今更合鍵が出てくるなんて、ほ
んと、思い出の残し方下手なんだから…」

(泣き出すアイ)

ユウヤ「一年も黙っていてごめん、アイがここに来られるようになるまで待とうと思って」

アイ 「いいよ…もう…」

アイ「でも…なんでユウヤがこれを持って…っ…」

(ユウヤ、アイを崖に突き飛ばす)

(暗転)

ユウヤ (声)「合鍵なんて、渡させるわけないだろ」

(ユウヤ、来た道に戻る)

ユウヤ (声)「ほんとは、全部、俺なんだよ。あいつの鞆から合鍵を抜いたのも、それを探
しに外へ出たあいつを崖から落としたのも。それから…お前のそばにいたのも、お前がまた
ここに来る日を待っていたからなんだよ、アイ…」

(ユウヤ、車に乗り込みエンジンをかける)

ユウヤ (声)「カズキ、アイ、何も変わらないって思っていたのはお前らだけだよ」

完